

JICA's world

MARCH 2009 No.06 03



特集

いのち

“生命の水”を届けるために



春夏秋冬⑥ ナウルーズ

奇跡を起こす 聖旗を掲げ 新年を祝う

文・写真 安井浩美

1963年大阪府出身。93年からアフガニスタン取材。アフガン遊牧民の生活の記録撮影をライフワークとする。現在は共同通信社のカブール支局通信員。著書に『私の大好きな国アフガニスタン』（あかね書房）。

ペルシャ暦の新年元旦を言う「ナウルーズ」。ペルシャ語でナウは「新しい」、ルーズは「日」を意味し、春分の日に当たる。アフガニスタンでは、例年3月21日がナウルーズだ。人々は、春が近いことを喜び、そして新年を祝い、各地のイスラム聖者廟では、「ジャンダ・バラ」と呼ばれる聖なる旗を掲げる儀式が行われる。

北部のマザリシャリフにあるハズラト・アリ廟※は、特に盛大にジャンダ・バラが行われ、各地から数万もの人がこの儀式を一目見ようとやって来る。中庭に掲げられたジャンダ（聖旗）に巻かれた布は、奇跡で病を治すといわれ、人々はその布を持って帰ろうと、ジャンダによじ登り、すさまじい光景が繰り広げられる。ジャンダは40

日間掲げられ、その間、聖廟には病に苦しむ多くの人が祈願に訪れ、奇跡を待つ。

一般家庭では、7種類のドライフルーツやナッツを砂糖水に漬けた「ハフト・メイワ」が訪問客に振る舞われ、新年を祝う。



ハフト・メイワ



※イスラム教の正統カリフ(預言者ムハンマド没後のイスラム社会の最高指導者)4代目アリが眠る。

Contents

02 春夏秋冬 奇跡を起こす聖旗を掲げ新年を祝う

04 特集
“生命の水”を届けるために

安全で安定した水供給を目指すJICAの支援
生命をつなぐ安全な水を人々に届けよう カンボジア
村人の手で井戸を守り続けるために ザンビア
アフリカの水問題に挑む「水の防衛隊」 アフリカ



16 PLAYERS 北九州市の経験をスラバヤ市へ

18 地球号の子どもたち 高校生がフェアトレードを体験学習

20 ゲンバの風

シニア海外ボランティア
木村美美世／岡田剛

シニア世代が伝える
ものづくりの醍醐味



22 地域と世界のきずな 地域を元気にする国際協力を始めよう 北海道滝川市

24 JICAに聞きたい! JICA研究所ではどんな研究をしているの?

25 JICA UPDATE

26 イチオシ!

27 地球ギャラリー

セネガル

サヘルに生きる
遊牧の民



35 MONO語り 刺繍と陶芸、伝統を生かした商品で貧困から脱出!

36 MY ACTION ゾマホン・ルフィン タレント



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙 撮影：今村健志朗

カンボジア・シェムリアップ市
で、日本の支援で整備された
水道が開通し、透明で安全
な水に駆け寄る子どもたち



“生命の水”を届けるために

編集協力：沖大幹・東京大学生産技術研究所教授

私たちの生命の源である水をめぐり、さまざまな問題が深刻化している。全世界で6人に1人が安全な水を利用できない状況だが、人口増加や急速な都市化、気候変動などの影響により、今後ますます安全な水の確保が困難になることが予想される。日本に暮らす私たちとも深くかわる水問題に取り組むため、国際協力の強化が求められている。

途上国で深刻化する水問題

私たちが当たり前のよう利用している安全な水。毎日の健康と暮らしを支える欠かせない資源だ。しかし、世界には安全な水を得られない11億もの人々が存在する。

特に開発途上国では水道や井戸などが不足し、地方では女性や子どもが毎日数時間を水くみに費やし、学校へ通えない子どもも多い。地方からの人口流入が止まらない都市部では、水道の整備が人口増加に追い付かず、スラムなどに住む貧しい人々は、水道料金より高い金額で安全かどうかも定かではない水を購入せざるを得ない場合もある。また、トイレなどの衛生施設が未整備なために、水が汚染され、下痢や感染症がまん延している。そうした水や衛生に起因する病気で亡くなる乳幼児は年間200万人にも上る。

沖大幹・東京大学生産技術研究所教

授は、「水の問題は分配の問題でもある。日本人は生活用水として一日に300リットル以上を使うが、そのうち生きていくために必要な飲料水は一日約2リットル。途上国ではそのわずかな水が手に入らずに、人々が貧困から脱け出せずにいる」と話す。

だが、世界の水環境はますます過酷な状況にある。途上国の人口増加により、食料生産に必要な農業用水の需要が伸びているのに加え、産業化や都市化が進み工業用水・生活用水の使用量も増えている。そのため、水資源の争奪が起き、各地で川や地下水が枯渇するなど水不足が深刻化している。

また、生活排水・工業排水の増大で、水質汚濁も広がっている。さらに、気候変動の影響により干ばつや洪水が多発し、このような事態に対応できない途上国では良質な水を安定的に入手するのは一層難しくなっている。

世界の水問題と日本の関係

こうしたグローバルに影響し合う水の問題に取り組むためには、日本を含む国際社会の協力が不可欠だ。3月16〜22日には、世界各国の首脳や研究者などが水問題を話し合う「第5回世界水フォーラム」がトルコ・イスタンブールで開催され、効果的な対策が打ち出せるか注目されている。

また、国際社会の共通目標であるミレニアム開発目標(MDGs)では、世界の貧困削減に向けて、「安全な飲み水や基本的な衛生施設を利用できない人々を2015年までに半減させる」ことが目標の一つに掲げられ、国際機関や各国の援助機関の支援のもと、給水・衛生施設の整備などが進められている。日本も、途上国の水・衛生分野の課題への支援において主導的な役割を担っている。

日本に住む私たちも水問題と無関係で

はない。食料自給率約40%の日本は、穀物や肉類など多くの食物を輸入しているが、それらの生産には大量の水が使われる。沖さんは「小麦1キログラムの生産に約2トン、牛肉には約20トンの水が消費されている。世界の水不足や水の需給バランスの崩れは、私たちの食料問題とも密接にかかわっている」と強調する。水分野の国際協力は、私たち自身の生活にとっても重要だといえる。

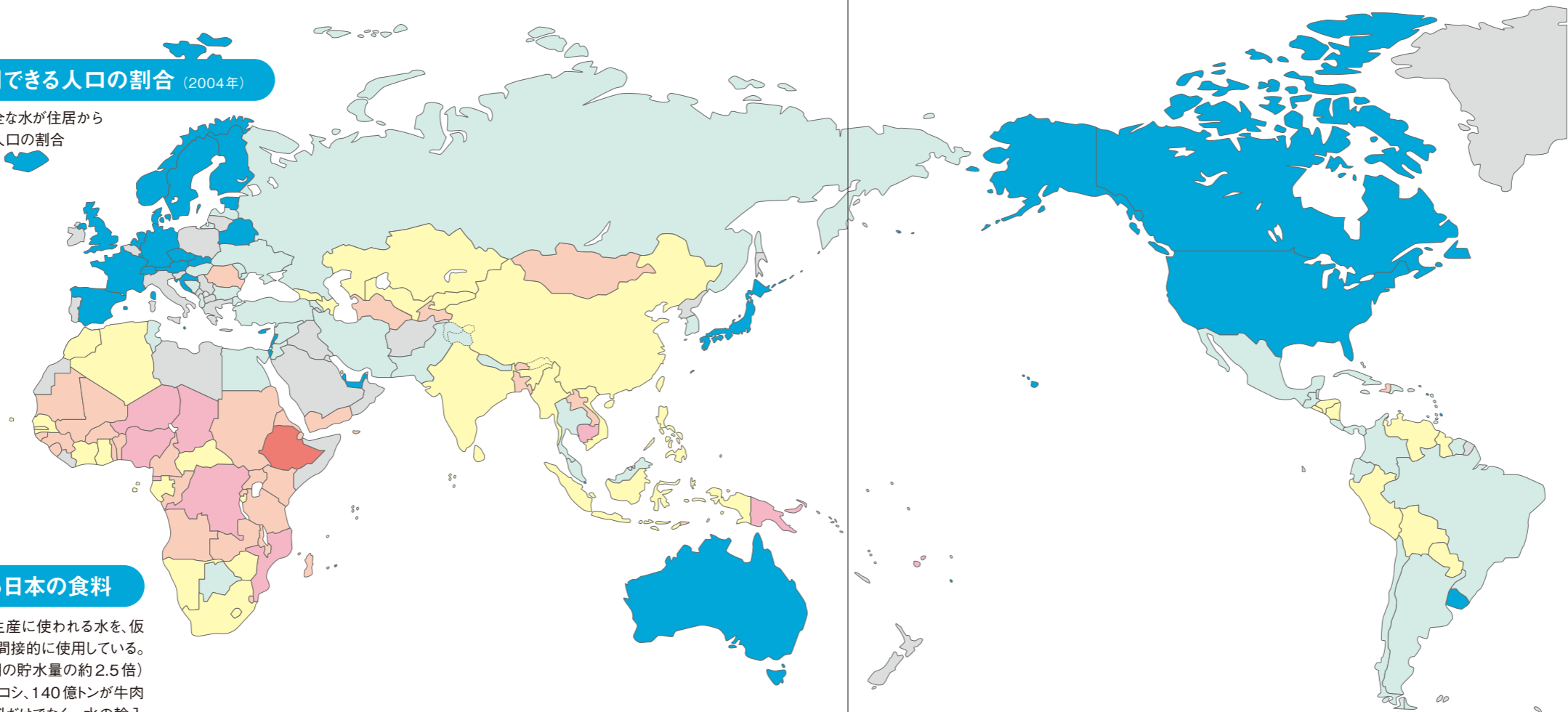
「今後さらに、地下水の持続的な利用や、海水の淡水化、雨水の有効利用、節水農業や水料金従量制の導入など、日本が得意なさまざまな水関連技術が必要とされるだろう」と沖さん。かつて日本にも、水需給逼迫や水質汚濁、洪水・渇水に苦しんでいた時代があった。それらを克服してきた経験や技術は、世界の水問題に取り組む、途上国の人々に安全な水を届けるために、大いに役立てられるはずだ。

安全な水資源を利用できる人口の割合 (2004年)

1人1日当たり最低20リットルの安全な水が住居から1キロ以内の距離に確保されている人口の割合

- 100%
- 90%以上 100%未満
- 75%以上 90%未満
- 50%以上 75%未満
- 25%以上 50%未満
- 25%未満
- データなし

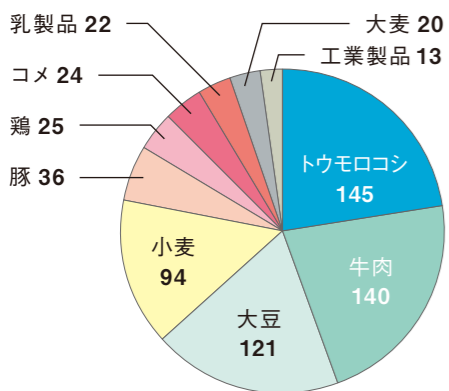
出典：国連開発計画 (UNDP) 「人間開発報告書 2008」



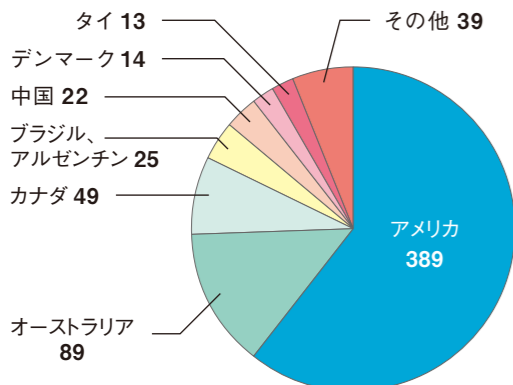
海外の水に依存する日本の食料

日本は、海外から輸入する食料の生産に使われる水を、仮想水(バーチャルウォーター)として間接的に使用している。その量は年間約640億トン(琵琶湖の貯水量の約2.5倍)にも上る。うち145億トンがトウモロコシ、140億トンが牛肉の生産に使われている。日本は食料だけでなく、水の輸入大国でもある。

輸入仮想水の種類別内訳 (億トン)



日本が仮想水を輸入している国と輸入量 (億トン)



出典：東大生産技術研究所・沖大幹研究室「日本の仮想投入水総輸入量(2000年度の食料需給表統計値より)」
(<http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/Info/Press200207/>)

①安全で安定した水の供給（利水）
 すべての人に安全な水を安定的・効率的に供給するため、水供給計画の策定や、給水施設の整備、住民参加型の水管理組織の育成、水道事業者の経営能力の強化、衛生環境の改善などを支援。「2015年までに安全な水と基礎的衛生設備を利用できない人口の割合を半減する」というミレニアム開発目標（MDGs）の達成を目指す。

②生命・財産を守るための治水の向上（治水）
 洪水などの水害から人々の生命や財産を守るため、堤防やダムなどの整備と、予警報システムの構築、ハザードマップの作成などを組み合わせた防災計画の策定、防災教育を通じた住民・コミュニティの防災能力の向上、防災行政体制の強化などを支援している。

③水環境の保全（水環境）
 水質の改善や流域全体の水循環に応じた環境保全を進めるため、適切な水環境政策の策定、社会全体の水環境管理能力・技術の向上、下水処理施設の整備・維持管理、住民への環境教育の推進などを支援している。

④統合的水資源管理の推進
 統合的水資源管理とは、「利水」「治水」「水環境管理」という多面的な視点に配慮して、包括的に水資源を管理すること。特に、希少化している水資源の適切な開発・管理のため、水利用・土地利用に関する政策・計画の策定、流域全体の水収支（一定期間に流入する水の量と流出する水の量の関係）の把握のための観測やデータの整理・活用、関係機関の能力強化などを支援している。

井戸・水道などの給水施設が持続的に維持管理されるよう、地方の村では住民参加型の水管理組織の育成を、都市部では水道運営機関の維持管理能力・経営能力の強化を図る技術協力を行っている。



住民に井戸の維持管理方法を指導する青年海外協力隊員(右)

ウガンダ

無償資金協力による井戸の建設と青年海外協力隊による維持管理支援

日本は1997年からウガンダ中西部の約400の村で井戸の建設を支援してきた。しかし、井戸を維持管理する村の管理組合が十分に機能していなかったため、2002年より青年海外協力隊員を派遣し、井戸の現状調査や、管理組合の運営改善、修理技師の配置、衛生教育などを支援している。

給水施設の持続的な維持管理

途上国ではトイレなどの衛生施設や下水道施設が整備されていないため、生活排水・工業排水が未処理のまま流出し、水環境だけでなく居住環境を悪化させ、感染症などの病気の原因となっている。JICAは円借款や無償資金協力です下水道施設を整備するとともに、住民への衛生啓発活動や衛生施設を普及する技術協力を行っている。



円借款で整備された下水道施設

ブラジル

「トードス・オス・サントス基本衛生環境改善事業」

都市化・工業化が進むバイア州の州都サルバドール市では、トードス・オス・サントス湾に未処理の生活排水や工業排水が流れ込み、生活環境に悪影響を与えていた。そこで、円借款により下水道システムを整備。下水道普及率は26%（1997年）から69%（2006年）に向上し、住民の生活環境と健康の改善、周辺海域への環境負荷の軽減に貢献した。

衛生改善

私たちが通常利用できる水は、地球上にある海水も含むすべての水のわずか0.01%にすぎない。近年の人口増加・経済発展による需要の高まりで、一人当たりの利用可能な水量は減り続けており、水質も悪化している。また、多くの地域で砂漠化や渇水が問題になる一方、洪水被害が増加している地域もある。特に途上国では、水不足だけでなく、水質汚濁、水災害など、水にかかわる問題がますます深刻化・多様化している。

一般的に「水資源」とは、農業・工業・発電・生活用水などとして利用できる水（利水）を指すことが多い。しかし、限られた水資源を持続的に活用するためには、利水の観点だけでなく、洪水や渇水の対策（治水）、環境資源（水環境）の観点からも問題をとらえて、総合的に取り組むことが有効だ。

JICAは、すべての人が良質な水を持続的かつ公平に利用できるようにすることにも、水害の被害軽減や水環境の保全を図るべく、次の4つの目標を掲げて支援を行っている。

人々の健康と暮らしに直結する「安全で安定した水の供給」のための支援とその事例

水資源の開発や水道整備の計画策定のための技術協力を行うとともに、井戸や水道などの給水施設を無償資金協力・円借款で整備している。

給水施設の整備

バングラデシュ

「チッタゴン上水道セクター支援」

バングラデシュ第2の都市・チッタゴン市では水道普及率が48%にとどまっている。JICAは2000年に調査を行い、市内全体に水を安定供給するための水道整備事業計画を提案。その計画に沿って、円借款やバングラデシュ政府の資金で浄水場が整備されてきている。また、漏水や違法接続など無収水の問題に対処できるよう、上下水道公社の能力強化を図る技術協力も実施し、水道普及率の向上を目指す。



水道の数や給水時間が限られているため、長時間並んで水をくむ人々

開発途上国で水の問題が深刻化・多様化する中、JICAは安全で安定した水の供給を実現するため、給水施設の整備、持続的な維持管理、衛生改善に取り組んでいる。

安全で安定した水供給を目指す JICA の支援



日本の支援で整備されたブンプレック浄水場。約55万人が安全な水を利用できるようになった



ブンプレック浄水場のモニター室では、24時間体制で全システムが管理されている



ブンプレック浄水場の分析室。水質分析を行い、安全な水の提供に努める

浄水場の整備と人材育成で プノンペン市民に 安全な水を供給する

首都プノンペン中心部から車で約30分。喧騒とした都市の雰囲気から一変、道なき道を走っていくと、小さな木造の家々が立ち並ぶ村が見えた。プノンペン郊外のクモンク地区。約1000世帯が暮らす貧困地区だ。

2009年1月中旬、一軒の家の周りに人だかりができていた。そこには、地面を掘り起こし、配水管を設置するプノンペン水道公社の作業員の姿が。住民の一人に聞くと、「この家に水道を引いているんだよ」と教えてくれた。

細長いパイプの先に取り付けられた蛇口をひねると、勢いよく水が流れ出た。家の主人

ニエム・ソフィさんはタクシードライバーの運転手。「長い間、この日を待ちわびていた。本当にうれしい」と笑顔を見せる。その日、村では新たに2世帯に水道が引かれた。

1990年代初頭、カンボジアは長年続いた内戦の影響で、プノンペンをはじめ都市部は荒廃し、特に水道施設の老朽化が深刻だった。復興支援を開始したJICAは、93年にプノンペン市上水整備のための調査を行い、2010年を目標準次とする基本計画と緊急に整備すべき水道施設の改修計画を策定した。それを踏まえて、94年に日本がブンプレック浄水場を改修。続いて、フランス、世界銀行、アジア開発銀行などが、次々に市内の配水管を整備した。

03年に再び拡張されたブンプレック浄水場は、プノンペン駅のすぐそば、水道公社のオ



プノンペン郊外で、配水管の敷設作業を行うプノンペン水道公社の作業員

生命をつなぐ

安全な水を人々に届けよう

20世紀後半、約20年にわたる内戦を経験したカンボジア。

長年の争いによってもたらされた負の遺産は、崩壊した都市の姿であった。

その中で、人々の生活に欠かせない「水」の供給にも壊滅的な被害が及んだ。

しかし今、老朽化していた水道施設が、日本をはじめ国際社会の援助で生まれ変わりつつある。

写真= 今村 健志朗 (フォトグラファー)

フィスに隣接している。目の前に広がる施設は、想像以上に立派なもの。「この15年で、プノンペンの水道事情は劇的に変化した」と話すのは水道公社のエク・ソン・チャン総裁だ。彼は、94年に総裁に就任して以降、力強いリーダーシップで水道公社の再建を図ってきた。「これも、JICAという頼もしいパートナーの協力のおかげです」。

国際社会の支援により、水道施設はほぼ整備された。となると、今度はそれを運用する人材の育成が求められる。そこで、JICAは03、06年に、北九州市水道局、横浜市水道局の協力を得て「水道事業人材育成プロジェクト」(フェーズ1)を実施。水道公社職員が施設を適切に維持管理できるよう、技術指導を行った。

チーフアドバイザーを務めた山本敬子：J



プノンベン水道公社のチャン総裁。プノンベン水道事業の功績が認められ、2006年にアジアのノーベル賞として知られる「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞した



シェムリアップ市内で、配水管敷設替工事について協議をする北九州市水道局の森木茂広専門家(左)とシェムリアップ水道公社職員

8つの州都で 水道局職員の能力を向上し 水道の普及を目指す

首都圏で水道の普及が進む一方、地方の給水状況は依然として深刻だ。JICAはプノンベンでの成果を生かして地方展開を図るため、プロジェクトのフェーズ2を07年5月に開始。引き続き北九州市水道局と連携し、地方8州都の水道局の能力向上に取り組んでいる。

プノンベン以外の都市の水道局は、鉱工業エネルギー省が管轄していることから、プロジェクトでは、同省水道部の機能を強化するとともに、8州都の水道局職員に対して、浄水場の運転・維持管理や配水施設管理の研修、

実地訓練(OJT)を行っている。また、フェーズ1で育成されたプノンベン水道公社職員を、研修の指導者に起用。「私たちの次の役割は、資金・技術の両面から、地方の水道局をサポートしていくこと」とチャン総裁は強調する。

チーフアドバイザーは北九州市水道局の木山聡さん。フェーズ1でも、専門家として電気系統の指導を担当した。現在は各州都を回り、水道局職員の技術指導に精を出す。「まずは事故を起こさないよう、機械を適切に扱う技術を身に付けることが大切です」。シェムリアップ水道公社のソム・クンティア総裁は、「人材育成は時間がかかる仕事。JICAの支援を受けながら、持続的に取り組んでいきたい」と決意を語る。

8州都の一つ、世界遺産・アンコール遺跡群を有し、年間200万もの観光客が訪れるシェムリアップ。かつては「水の都」とも呼ばれていたが、03年時点の給水率は10%にすぎなかった。この観光都市の浄水場も、日本の支援で整備された。給水区域は市街地の7地区のうち4つ。06年に浄水場が完成してから給水率は6倍近くアップした。「井戸水には鉄分が多く含まれていて、洗濯すると服が変色することもありました。水道水は、最初は塩素のにおいが少し気になったけど、今は毎日きれいな水が使えて幸せです」とスラ・クラム地区の住民サム・フォンさんはうれしそうだ。

「シェムリアップの水源は地下水。浄水場で処理した後の水は、飲んでもまったく支障がない」と木山さん。確かに、浄水場で口にした、できたての水には少し甘みがあった。しかし近年の急速な人口・観光客の増加により、水源不足が深刻になっているという。

サラ・カムラエウク地区の地区長サム・ラソンさんは、「この地区の約4200世帯のうち、水道を使えるのは1000世帯程度。住民の生活・健康改善のために、一刻も早く、全世界に水道が引かれてほしい」と訴える。

カンボジアをはじめ、開発途上国には安全な水を利用できない人がまだまだ多い。木山さんは「支援に『これで終わり』という地点はない。これからも現地の人たちと二人三脚でやっていきたい」と意欲を見せる。

「水は人の生命をつなぐ貴重な資源だ。国民に安全な水が行き渡ることが私の夢」とチャン総裁。その夢の実現に日本の技術が生かされ、カンボジアの人々の手で、生命の水が広がっていくことを期待したい。

JICA国際協力専門員は、「水道公社の職員は、何事にもとても熱心です。水の安全性に対する認識も高い。施設が整備され、優秀な人材がいる。さまざまな条件が重なり、プロジェクトも円滑に進み、施設の維持管理、水質管理などの技術を高めることができました」と話す。

チャン総裁も「日本人の専門家は、同じア

ジアということ親近感がある。細やかな指導能力も素晴らしい」と評価する。今後、円借款によるニロート地区の浄水場建設が予定されており、「給水率^{※1}100%達成に向けて、大きな期待が持てる」と展望を語る。

08年、プノンベンの無収水率^{※2}は6%にまで低下した。これは東京都や横浜市に次ぐ低い数値だ。1日10時間しか供給できていなかった

た水も、24時間利用可能になった。総裁補佐のチェア・ピソットさんは「今後は、貧困地域への水道普及に力を入れたい」と意気込む。水道公社は、貧困地域の住民に対し、収入に応じて接続料や水道料金を優遇するシステムを導入。冒頭のクモング地区のソフィさん、収入が1日3ドルのため、接続料の7割が免除されている。



子どもたちに、水の安全性について説明するシェムリアップ水道公社の職員



シェムリアップ浄水場の給水塔には、カンボジアと日本の友好の証として、両国の国旗が描かれている

水を運ぶ子どもたち。水道がない家庭では、子どもが水くみを担う

※1 安全な水が供給されている人口の割合。

※2 浄水場から送られた水の全量に対して、漏水や盗水によって失われる比率。



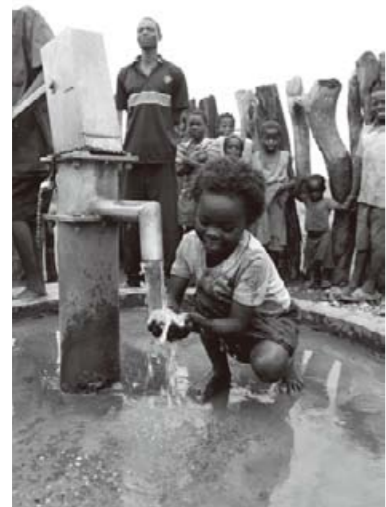
スペアパーツの店で在庫を確認するバンダさん(左)。店ができる前は、部品を主に援助機関やNGOからの支援に頼っており、在庫が底を尽けばそれっきりか、ルサカまで買いに行かなければならなかった

プロジェクトではまず、スペアパーツを常備している店舗を両郡に一つずつ設置し、店の運営・管理を担う郡役所の担当者を対象として話を進めた。プロジェクトは07年から、中央州の4つの郡に支援を拡大している。そこでは、バンダさんらムンブワ郡・モンゼ郡の役所の担当者が自らの経験を生かして指導に当たっている。高橋さんからプロジェクトを引き継いだ北島知美・JICA専門家は「今はまだ4郡に店

プロジェクトの成果を全国へ

プロジェクトではまず、スペアパーツを常備している店舗を両郡に一つずつ設置し、店の運営・管理を担う郡役所の担当者を対象として話を進めた。プロジェクトは07年から、中央州の4つの郡に支援を拡大している。そこでは、バンダさんらムンブワ郡・モンゼ郡の役所の担当者が自らの経験を生かして指導に当たっている。高橋さんからプロジェクトを引き継いだ北島知美・JICA専門家は「今はまだ4郡に店

プロジェクトで育成された修理工のまな手入れもあり、08年は度も大きな故障をしないという、ムンブワ郡カズンゴ村の井戸。清潔な水は子どもたちの健康も守る



といった課題が指摘されていた。そこでJICAは、ムンブワ郡と南部州モンゼ郡を対象に、スペアパーツの安定供給を実現し、住民自身が井戸を持続的に維持管理できる体制を整える「地方給水維持管理能力強化プロジェクト」を05年に開始した。08年9月までJICA専門家としてプロジェクトを指揮した高橋逸郎・JICA地球環境部特別嘱託員は、「井戸を持続的に使うには、行政だけでなく、住民自身も一定の責任を持ち、主体的に維持管理にかかわっていく必要がある」と話す。

プロジェクトではまず、スペアパーツを常備している店舗を両郡に一つずつ設置し、店の運営・管理を担う郡役所の担当者を対象として話を進めた。プロジェクトは07年から、中央州の4つの郡に支援を拡大している。そこでは、バンダさんらムンブワ郡・モンゼ郡の役所の担当者が自らの経験を生かして指導に当たっている。高橋さんからプロジェクトを引き継いだ北島知美・JICA専門家は「今はまだ4郡に店

といった課題が指摘されていた。

に、ルサカの代理店を通じた部品の搬入、在庫管理、財務管理の方法を指導。また、住民が修理を依頼する修理工を育成し、郡内に配置した。さらに、スペアパーツ購入などに充てる維持管理費を住民に共同負担してもらうよう、ラジオ・ポスターでの宣伝や現地NGOによる啓発活動を実施。村の水管理組合を使った維持管理費の徴収の仕方も指導した。



水をくむチボレラ村の女性たち。この地域では日本を含む海外からの支援で、手動式の井戸が多く設置されている



チボレラ村近郊のヘルスセンターで、井戸の修理用工具を管理するアルフレッドムウインガさん。工具は周辺の村々で共同で使われている



ムンブワ郡のスペアパーツの店。村人たちは井戸が故障すると部品を買いにやって来る

村人の手で井戸を守り続けるために

アフリカ南部のザンビアでは、地方の村を中心に、多くの人が安全な水を手にできない状況にある。井戸が足りなかったり、井戸があっても壊れるとすぐに修理できないことが主な要因だ。JICAは、人々が安全な水を安定して利用できるような体制づくりを支援している。



壊れると修理できない井戸

井戸のポンプをグッと下に押し、給水口から水が勢いよく流れ出る。瞬く間に新鮮な水でポリタンクが満たされていく。これをひよいと頭に載せ、家路につく女性たち。中央州ムンブワ郡チボレラ村の井戸には、今日もたくさんの方が水くみに訪れている。

人口の7割が地方の農村部で暮らすザンビア。村では井戸でくみ上げた地下水を使うのが一般的だ。しかし、井戸などの給水施設が足りないため、給水率はわずか37%、多くの人が安全な水を利用できずにいる。国際社会の支援で給水施設が建設されているものの、干ばつで枯渇したり、老朽化・故障して使わずに放置されているものも目立つ。

日本も1985年以来、1000基以上の井戸の建設を支援してきた。2004年の調査では、その8割が正常に稼働していることが確認された一方で、「壊れたときに、修理費が賄えない、修理工がいないなど、各郡の井戸の維持管理体制が不十分」「首都ルサカ以外の販売網がないために井戸の修理に必要なスペアパーツ(予備の部品)が地方に届かない」

舗を立ち上げる準備として、体制の整備や担当者の育成を進めている段階。財務管理や部品の継続的な供給を今後どう確保なものにしていくかなど、乗り越えるべき課題は多い」と説明するが、ほかの郡でも井戸が持続的に維持管理されるようになってほしいと努力するバンダさんら関係者の姿に、頼もしさを感じている。

ザンビア政府もプロジェクトの取り組みを高く評価し、地方給水改善に向けた国家プログラムで、プロジェクトの活動を「給水施設運営維持管理モデル」として全国展開することを決定。JICAはそのためのガイドライン作りを支援し、ほかの援助機関とも協調しながら、全国で普及を進めている。

安全な水を安定して供給する井戸は、人々にとって生活と健康の土台となる。その命の源を自ら守り続けていく活動がザンビア全土に広がり始めた。チボレラ村で見た、井戸に集まる村人たちの明るい笑顔も広がっていくに違いない。

特集 **「いのちの水」を届けるために**

有害物質の多い地下水を有効な水源として活用しようと、水資源開発の技術者、角田晋一郎隊員は水質検査や浄化方法を検証している。南部諸民族州とその周辺の地下水にはフッ素が多く含まれ、「目下の活動は、フッ素の除去方法を検討すること」だと言う。さまざまな浄化方法の中からエチオピアの地方給水に最適な手法を見いだすため、現地スタッフとともに試行錯誤を重ねている。「スタッフには、教科書や外国の事例ではなく実験結果から学んでいくという科学では基本的な姿勢が欠けていたが、一緒に実験を繰り返す中で、理論ではなく実践に基づいた結果をスタッフたちが理解してくれるようになった」と変化の兆しを報告する。

また、給水施設の整備に当たるのは土木技術者の児島直美隊員。同州には給水施設の施工管理を担える人材が不足している。児島さんは現地の技術者と村に足を運んで現場の調査や測量を行うなど、施設の設計から積算、工事発注と、施設完成までの一連の業務をサポートしている。公用語のアムハラ語でのコミュニケーションに苦労しているそうだが、根本的な考え方も仕事の進め方もスピード感もまったく違う異国の地で、小さなことでも何か一つ分り合えた瞬間は大きな喜びとなる。「自分のやり方に共感し、参考にしてもらったことで同僚とのきずなが深まったときはうれしかった」。

技術者育成と住民の衛生教育

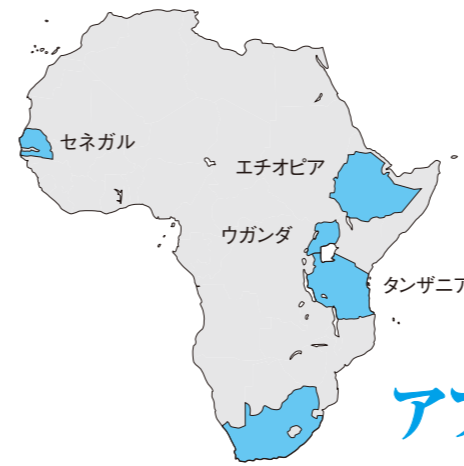
ンザニア、南アフリカ共和国、ウガンダへの派遣も予定されている。



給水施設の建設予定地で測量を行う現地スタッフ。最近、セメントやパイプなど資材の高騰も問題となっている



地表に染み出た水をくむ子ども。不衛生な地表水の利用は水系感染症の大きな原因だ



南アフリカ共和国

アフリカの水問題に挑む「水の防衛隊」

私たち人間の生活になくはならない水がアフリカで不足している。一人でも多くの人が安全な水とともに生きられるよう、日本の「水の防衛隊」が動き出した。

世界一給水率が低いエチオピア

アフリカ東部エチオピア。ここは世界でも給水率の低い国の一つだ。人口約8000万のうち、安全な水を手にできるのはわずか2割程度。6000万以上もの人々が安心して水を使うことができない。

中でも、首都アジスアベバから車で7時間の南部諸民族州は、国内で3番目に給水率が低い。人々は手掘り井戸や川・湖沼の地表水を一日何時間もかけて運ぶなどして生活用水を得ている。だが、こうした水は不衛生で、下痢症やコレラ、腸チフス、赤痢などの水系感染症にかかる人が後を立たない。豊富な地下水にもフッ素や鉄、マンガンなどの有害物質が含まれ、飲料用には向かない。

そうした状況を改善しようと、今まさに活動しているのが3人の「水の防衛隊」だ。青年海外協力隊員の彼らは、それぞれの専門性を生かして、同州が進める水源開発や給水施設の拡充事業の一翼を担っている。

「水の防衛隊」とは、より多くの人々に安全な水を安定的に届けるため、日本の技術者を水問題が深刻なアフリカ諸国などに派遣する日本の構想。2008年に横浜で開かれた第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)で福田康夫首相(当時)が発表した。水資源の確保、給水施設の整備・維持管理、水管理組合の活性化、衛生啓発といった分野を中心に、2013年までの5年間で約200人のJICAボランティアや専門家を派遣する計画となっている。

その第一陣がエチオピアの3人。すでにセネガルでも活動が始まっているほか、今後タ



水くみを手伝う少女と児島さん。こうした労働によって教育を受けられない子どもも多い

角田さんと児島さんが技術者の育成に取り組み一方、村落開発普及員の鈴木淑子隊員は主にコミュニティに対して給水施設の維持管理方法や水に関する衛生教育を行っている。もともとエチオピアにはこうした活動を担うコミュニティプロモーターと呼ばれるスタッフがいますが、人数・能力が十分とはいえない。鈴木さんはコミュニティの形成と、プロモーター育成に力を入れる。

安全な水を手にできない人は世界で1億人。その多くが暮らすアフリカの水問題を解決したいという熱き思いを込めた日本の「水の防衛隊」構想。水をめぐるさまざまな問題から人々を守る。彼らの今後の活躍が期待される。



2008年12月、「水の防衛隊」としてセネガルに派遣された村落開発普及員の奥河洋介隊員(右)と段原晴美隊員。日本と現地地「水の防衛隊」としての研修を受け、12月から住民による給水施設の維持管理体制を強化するための活動に取り組んでいる

「水の防衛隊」募集中!

JICAでは、「水の防衛隊」としてアフリカで活動する青年海外協力隊・シニア海外ボランティアを募集しています。詳細はホームページ(<http://www.w.jica.go.jp/>)をご覧ください。

派遣予定国：エチオピア、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ルワンダ、マダガスカル、ザンビア、ガーナ、セネガル、ベナンなど
活動分野：村落給水（公衆衛生、水管理組合の活性化、給水施設の維持管理など）、都市給水（運営維持管理、浄水施設管理、配管管理など）

募集期間：2009年度春（4月上旬～5月上旬）ほか順次

原口家は国際協力一家

国際協力に携わるのは今回の事業が初めてという原口さんだが、実は原口家は国際協力一家。ご主人の原口清史さんは北九州市の職員時代に、北京の日中友好環境保全センターに3年間赴任。退職後は、(財)北九州市国際技術協力協会(KITA)に所属し、JICAの研修事業も担当している。また、国土交通省に勤務する長女の原口祐子さんも、港湾関係の国際協力に携わる。祐子さんが幼いころは、アジアやアフリカから来た研修員を家に呼んで郷土料理を振る舞うなど、交流機会も多かったそうだ。



2007年に廃棄物対策の専門家としてパキスタンに行ったご主人の清史さん(左)



事業で水門や川沿いの遊歩道(右写真)が整備されつつあるが、川に流入する水路にはまだごみがあふれている



無収水対策のためのマルチメディア教材が完成

水道分野への支援も積極的な北九州市。開発途上国では水道管からの漏水や盗水など「無収水」の問題が深刻なことから、JICAとともに無収水対策支援を行ってきた。その経験を集約した視聴覚教材「水道事業における無駄な水を減らす取り組み～総合的な無収水管理」が北九州市水道局と東京都水道局の協力の下、(株)クボタ顧問の山崎章三氏の制作・監修により3月に完成。貴重な水資源を有効利用し、水道事業を健全に運営するノウハウがまとめられている。JICAのホームページ(<http://www.jica-net.com/ja2/>)で閲覧可能。



探知機で漏水音を調べる様子(カンボジア)も収録されている

プロジェクトを主導する原口公子・北九州市環境局環境科学研究所環境研究課長はまず、ゴムボートでカリマス川を下り、水質の現状を自分の目で確かめた。その上で、「川の汚れの原因が生活排水であることを住民と行政がきちんと認識す

公害を克服した経験を生かして

1997年から廃棄物対策の分野でも北九州市の協力を受けていたスラバヤ市にとっては、信頼関係で結ばれた願ってもないパートナーだ。
2007年、北九州市はJICAと連携して「スラバヤ市水質管理能力向上事業」※2を開始し、職員を派遣するなどして、モニタリングやデータ解析を担う人材の育成に取り組んでいる。

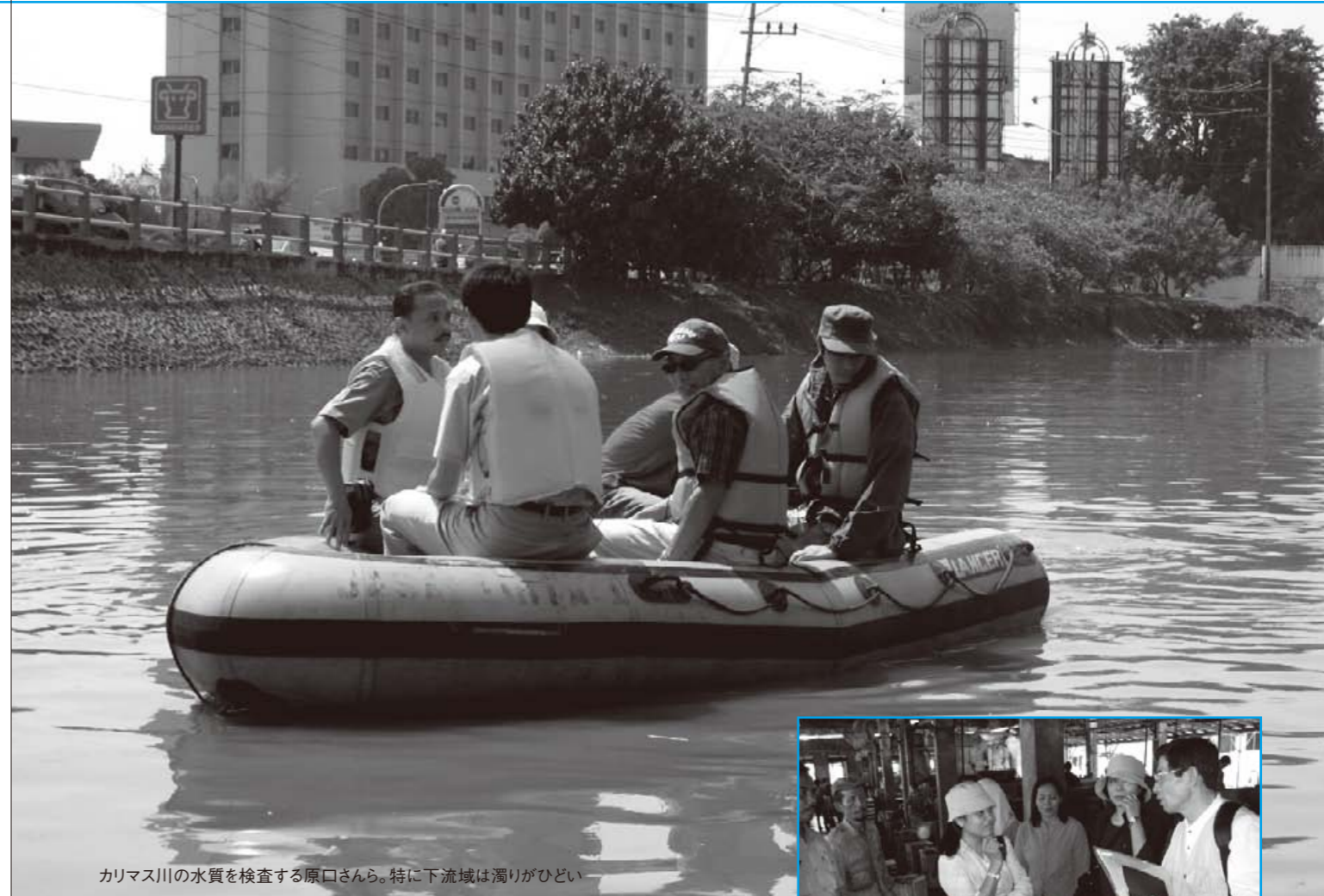
るために、川に流れ込むものをすべて集めて分析したり、一人が一日当たり排出する汚濁物の内容と量、生活形態などを細かく調べ、川に掛かる負荷を計算することが重要だ」と提案した。しかし、その調査や分析はなかなか順調には進まなかった。スラバヤ市の職員が調査手法を習得するまでに時間を要したことが主な原因だ。「スラバヤ市の河川は日本と違って常時水温が高く、気候も異なります。日本の技術をそのまま利用することはできないので、スラバヤに合ったものに活用していくことが大切」と原口さんは話す。

また、スラバヤ市の職員を北九州市に送り、河川と周辺の公園、道路、市街地などを計画的に整備してきた市の取り組みを学ぶ研修を実施。彼らからは

「日本のような下水道を造るためにはどうすればいいのかわからない」といったスケールの大きい質問も飛び出した。まずは水質改善という目の前の目標を地道にクリアしていくことが重要」と原口さんは説明している。

北九州市は06年度より「アジアの環境人材育成拠点」を目指し、5年間で2000人の研修員を受け入れる人材育成に取り組んでいる。また、アジアの諸都市とネットワークを構築して国際協力を積極的に推進している。負の経験を、強みに変えた北九州市は、まさしく日本の環境国際協力に不可欠なプレイヤーだ。

※1 都市計画などで求められる、建物・場所・景観・気候など生活環境の快適さ。
※2 地方自治体が主体となり、その地域社会が持つ知識や経験を生かして実施する「草の根技術協力地域提案型」による。



カリマス川の水質を検査する原口さんら。特に下流域は濁りがひどい



豆腐工場や牛の解体場などを視察し、排水について聞き取り調査を行う原口公子さん(右から2人目)とスラバヤ市の職員

PLAYERS

国際協力の担い手たち

北九州市の経験をスラバヤ市へ

インドネシア・スラバヤ市では、市内を流れるカリマス川に生活排水が流れ込み、水環境が悪化している。公害から奇跡の復活を遂げた北九州市は、その経験を生かし、川の水質改善を担う人材の育成に協力している。

カリマス川を町のシンボルに

生活排水はカリマス川へ垂れ流し、流域にはごみの不法投棄も。だが人々は気にする様子もなく、川で泳ぎ、釣りを楽しむ——こうした光景がごく当たり前のスラバヤ市。インドネシア第2の都市として急速に工業化・都市化が進む同市では、生活排水や工業排水が増え、川の水質汚濁が深刻な問題になっている。

そんなカリマス川を名実ともにスラバヤ市のシンボルとして復活させるべく、同市は治水対策に加え、商業施設や公園、遊歩道などの親水空間の整備を兼ね備えた「カリマス川再生事業」を開始した。全長12キロの川沿い9地区を重点地域とし、水環境の改善、都市アメニティ※1の向上、観光振興などに取り組む。

川の水質改善から取り掛かるが、改善計画の立案に必要なモニタリングやデータ解析が適切に行われていなかった。そこで支援に「肌脱いだのが、北九州市。高度経済成長期に発生した公害による「ばい煙の空」「死の海」を克服してきた北九州市には、その過程で培った技術や人材が蓄積されている。すでに



報告会では、企画に協力した各NGO担当者らによるパネル討論会が開かれ、「国際協力は特別なことではない。途上国のことを知りたいという気持ちさえあれば、できることは多いはず」とメッセージを送った

グアテマラの民芸品を地域のイベントで販売した県立国際高校の生徒たち。フェアトレードを解説したチラシも配った



兵庫県立国際高等学校

東南アジアの若者に農業や保健分野の技術研修などを支援する(財)PHD協会が実施した学習会でタイの少数民族について学んだのは、県立三木東高校の生徒たち。彼らはその後、少数民族の伝統手織物を地元のホテルで販売する活動を行った。報告会では、HIV/エイズのまん延や教育環境の未整備といった少数民族の貧困問題を紹介。そして「活動を通して、豊かな国の人々が『知らない』『知ろうとしない』『知っても行動を起こさない』ことが本当の貧しさを生み出しているのでは、と

知ること、伝えることが大切さを学ぶ

現状を変えるために自分たちができる国際協力の一つと知り、実際に文化祭や地域のイベントで、べばつぶが扱うフィリピンのドライマンゴーを販売した。3年生の南原綾さんは、「好きなものを自由で買える先進国の豊かさの裏には、私たちが目を向けるべきさまざまな問題がある」と訴える。「今回の経験は、自分の日々の暮らしや恵まれた環境を見直す機会となった。大学でもフェアトレードを研究してみたい」。

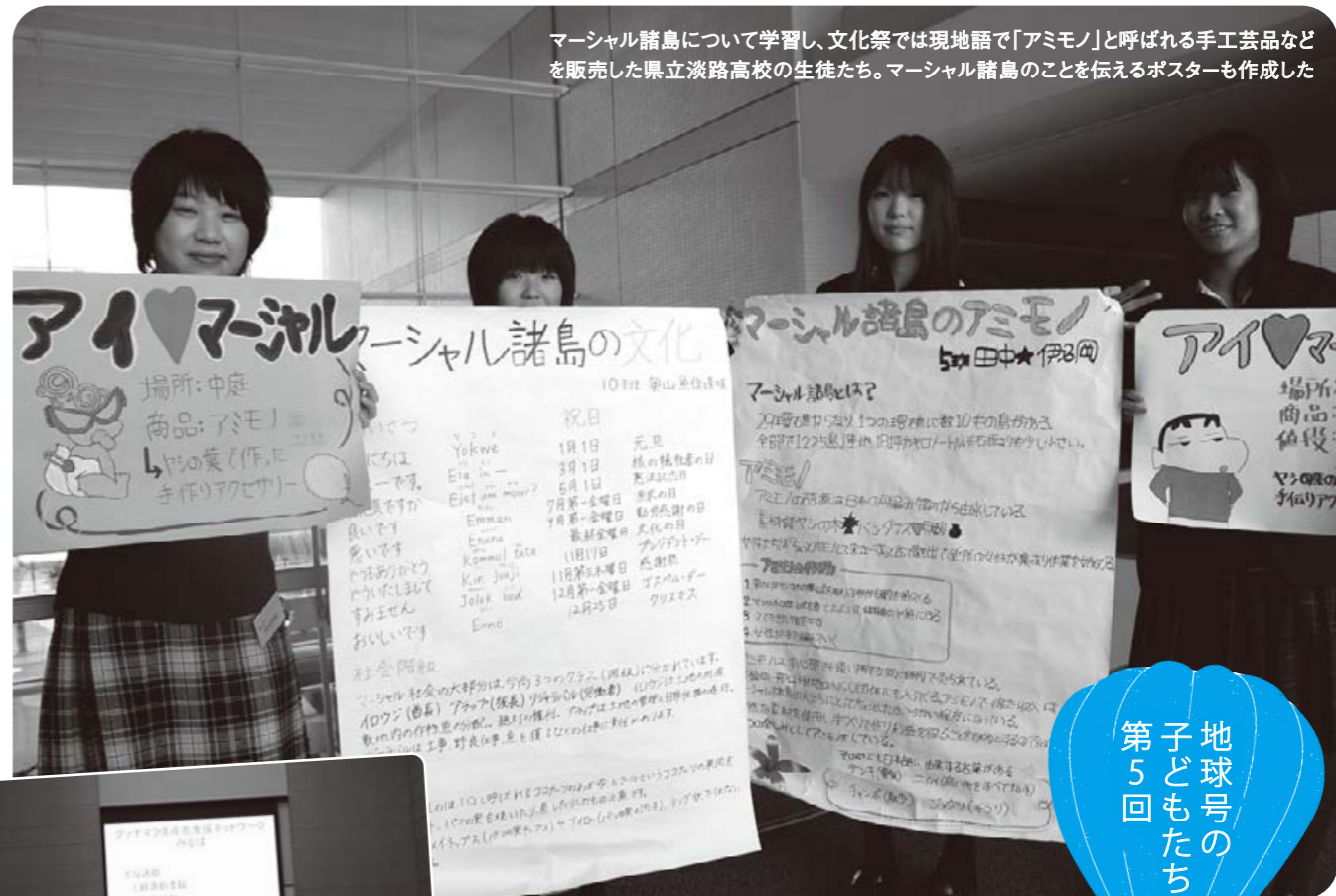
ほかにも、文化祭で多くのパングラデシユ製手工芸品を売ることができた定時制の市立神戸工科大学、全校生徒にアンケートを取りフェアトレードの認知度を調べた市立葺合高校、文化祭でグアテマラの布・ビーズ製

考えるようになった」と話した。同校の岡本優子先生は「販売体験では、少数民族のことやフェアトレードの意義も一生懸命説明していたようです。日本にいる自分に何ができるのかを真剣に考え、行動する彼らの姿が印象的でした」と目を細める。また、発表では「高校生を対象にフェアトレード商品のアイデアコンテストを開催する」など、フェアトレードを広めるために高校生ができる活動も提案。協力したPHD協会の川原桂さんは、「高校生ならではの自由な発想に、たくさんヒントをいただいた。今後さまざまな形で一緒に活動していきたい」と期待を膨らませる。「フェアトレードは生産者の暮らしを支えるだけでなく、購入する人々の視野を広げることができる。国際協力は『ギブアンドテイク』なんだと気付いた」と言うのは3年生の前田拓海さん。将来は国際機関に就職したいと考えている。

品を販売した県立淡路三原高校など、報告会でそれぞれの取り組みを発表し合い、たくさんの刺激を受けた高校生たち。「まずは知ることから始めよう」と誓いを新たに、「現地の状況をこの目で確かめたい」と目を輝かせた。今回のかけがえのない経験は、彼らの視野を広げ、次の行動へと踏み出す大きなきっかけになったといえるだろう。



べばつぶの学習会でフィリピンのドライマンゴー生産者の話を聞く洲本実業高校の生徒たち



マーシャル諸島について学習し、文化祭では現地語で「アミモノ」と呼ばれる手工芸品などを販売した県立淡路高校の生徒たち。マーシャル諸島のことを伝えるポスターも作成した



参加型のフェアトレード学習を経て報告会に臨んだ高校生たち。企画を担当したJICA兵庫の井手久美子・国際協力推進員は「国際的な視野を広げるきっかけとしてほしい」と話す

地球号の子どもたち
第5回

高校生がフェアトレードを体験学習

兵庫県の高校生たちが、フェアトレード※を通して、開発途上国の問題や身近にできる国際協力について考えた。彼らはどんな活動に取り組み、何を学んだのか。

※途上国の生産物を適正な価格で取引することで、弱い立場にある生産者の収入向上と自立を支援する取り組み。

私たちの豊かさの裏にあるものに目を向けよう

海からの寒風が吹き荒れる1月11日。神戸港に面したJICA兵庫に、兵庫県の7高校から約50人の生徒たちが集結した。彼らは、JICA兵庫主催の「Youth Meets A」※1の参加者。2008年9月に始まったこの企画は、フェアトレードに携わるNGO6団体※2の協力のもと、高校生が途上国の現状について学び、文化祭などでフェアトレード商品を販売して国際協力を体験するというもの。この日、約4カ月にわたる各校の活動の報告会が行われた。「ある有名スポーツブランドのサッカーボールは、つい最近までパングラデシユの子どもたちの児童労働で生産されていた」会場にそう語り掛けたのは、県立洲本実業高校の生徒たち。彼らは、世界の貧困問題の一つとして児童労働について調べ、その成果を発表した。きっかけとなったのは、フェアトレードでフィリピンの貧しいマンゴー農家を支援するNGO「べばつぶ」が行った学習会。「貿易ゲーム」と呼ばれるワークショップを通して、情報や技術の格差によって先進国と途上国に不平等な貿易体制が生まれ、貧富の差が広がっていることを学んだ。また、フェアトレードはそんな

ゲンバの風

文Ⅱ工藤律子 写真Ⅱ篠田有史

シニア世代が伝える
ものづくりの醍醐味



木村芙美世さん
Kimura Fumiyo

岡田剛さん
Okada Tsuyoshi

メキシコ南部のオアハカ州は、山々に囲まれた盆地に先住民の伝統が息づく、魅力的な地域。だが、文化的豊かさの陰で、経済的貧困が人々の生活を脅かす。この現実を少しでも改善しようと奮闘する2人のシニア海外ボランティアを紹介する。

女性に服飾デザインを指導

「オアハカの女性たちは代々、自分の村独自の刺繍を、おばあちゃんから教わるんです。だから、その刺繍を生かしたもののづくりを考えています」

刺繍で飾られたドレスを前に、木村芙美世さんが言う。木村さんは2007年7月からシニア海外ボランティアとして、州都オアハカ市から車で30分の職業訓練校で、女性たちにデザインと型紙作り、縫製を教える。シニア海外ボランティアとして活動するのは3度目だ。これまでの派遣国（ホンジュラス、ドミニカ共和国）もすべてスペイン語圏。最初は、ラテンの大きな気質が「私に似ている」と気に入ったが、次第に人々が「時間を守らない」ことに悩まされるようになった。「この学校でも、最初は校舎の鍵を開ける人までが遅刻ばかりで」と苦笑する。

木村さんは40年以上、服飾デザインと洋裁の仕事をしてきたベテランだ。職業訓練校の生徒は、半分以上がすでに洋裁指導者として働く女性であるため、「初めは、プロだと思っっている人たちのプライドを傷つけずに指導するのが、大変でした」と話す。

短期講習で資格を取っただけの「プロ」を含め、生徒たちは皆、仕上げの丁寧さやデザインの独創性に欠けていた。が、次第に自分の欠点を認め、学習意欲を高めると、ぐんぐん上達。コース終了時に開いたファッションショーでは、自分の作品を身にまとい、誇らしげにステージを歩いた。デザインが好評で仕立ての注文が来た人や、作品自体が売れた人も。

「先生には技術だけでなく、思いやりの心を教えられました。教える糧に自己実現していきたい。希望をつかんだ女性たちは貧困を脱し、経済的に自立することを目指す。」

「みんな本当は大変な家庭事情を抱えているのに、忍耐強く、よく頑張ってくれました」。自身も働く母親である木村さんは、オアハカの女性たちが自信を手により良い生活を勝ち取っていくことを、心から願っている。

もっと売れる陶芸品を

美しい刺繍製品と並び、オアハカで有名な民芸品といえば、陶器。素朴な色、形の皿やつぼが観光客に人気だ。しかし、「デザインはバラバラで、品

質管理もされていない。食器として売るには、均一な物を高品質で作ることが大切なのですが」

そう話す岡田剛さんは、磁器デザインを教えるシニア海外ボランティア。2つの職業訓練校で、工業製品として販売できる食器作りの人材育成に携わる。伝統技術に新しい製造技術を導入して地場産業に育て上げる試みだ。赴任後、デザインだけでなく、釉薬の使い方や焼き方、果ては窯の作り方で指導することになり、「料理（デザイン）を作りに来たのに、鍋（窯）を作ることにした」と笑う。

岡田さんはサラリーマン時代に一度、JICAの短期専門家として、ハンガリーで磁器の品質管理を指導した経験がある。会社を退職した翌年の07年にここへ来た。普段はオアハカ市からバスで5時間の小さな町イステベックに暮らし、地元訓練校の生徒3人を指導、月に1度オアハカ市内の学校で教える。

生徒たちは主に、伝統陶芸品を作る家庭の若者だ。設備の不十分な環境で、若者たちに慣れないスペイン語で根気よく指導する岡田さんの姿は、まさに「マエストロ（師匠）」。「日本で1カ月の仕事で、ここでは半年

PROFILE

木村芙美世 きむら・ふみよ

1941年静岡県出身。文化服装学院卒。学校の講師や衣料品会社のデザイナーなどを務めた後、ドレスメーカー教室を開く。シニア海外ボランティアとして2001～02年ホンジュラスでドレスメーカーを、04～06年ドミニカ共和国で型紙作りを指導。07年7月～08年10月までメキシコで活動。

岡田剛 おかだ・つよし

1949年山口県出身。同志社大学工学部工業化学科卒。エネルギー管理士、公害防止主任管理者、高圧ガス作業主任者、大気関係公害防止管理者の資格を持つ。2006年まで日本陶器（株）に勤務。95年にJICA短期専門家としてハンガリーに赴任。07年7月～09年3月までメキシコで活動。

かかる。問題があっても、すぐに解決しようと思わないのは困る」と嘆きながらも、「彼らは作る技術は持っているが、作った物をもっと売ってもらいたいね。売れると、また頑張ろうと思うから」と期待を述べる。その思いを感じ取ってか、生徒の一部は、食器製造販売の小さな会社の設立を計画中だ。夢をかかなえるためにも、「無鉛の安い材料を使って、いかに均一の物を作りだすかが課題」とマエストロは先を見つめる。

木村さんと岡田さんの生徒たちが製作したランチョンマットとスープ皿をプレゼント！ 詳細は34-35ページをご覧ください。



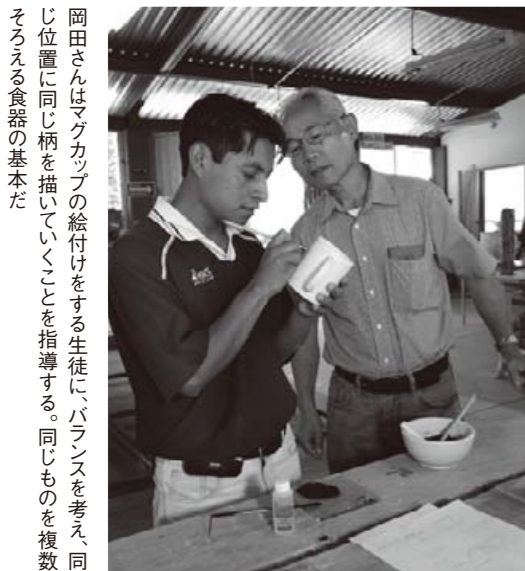
生徒が窯に入れる作品を確認する岡田さん。いいところは褒め、直すべきことはきちんと指摘、のんびり気質の生徒たちにハッパを掛ける



自らの作品を身にまとい、あるいは子どもに着せて、誇らしげにポーズする生徒たちに囲まれ、木村さんも幸せそうだ



伝統的な刺繍を施した布を、ランチョンマットに仕立てる生徒に、木村さんは褒め言葉を掛け、彼女たちの頑張りを引き出している



岡田さんはマグカップの絵付けをする生徒に、バランスを考え、同じ位置に同じ柄を描いていくことを指導する。同じものを複数そろえる食器の基本だ



生徒たちと木村さん（中央）。若い初心者も、頑固な「洋裁のプロ」の中年女性も、今では皆、思いやりを持って指導する「木村先生」のファンだ。

滝川市



北海道滝川市

面積115.82平方キロ、人口約45,000人。農業が盛んで、リンゴ街道、フルーツ街道、アスパラ街道、コスモス街道など、さまざまな街道があり、地域おこしにも注力。1990年に設立された滝川市国際交流協会(現(社)滝川国際交流協会)を中心に、95年からJICAの研修事業に協力し、マラウイをはじめ開発途上国の研修員を受け入れている。市民がマラウイの研修員を訪ねるスタディーツアーなども実施している。



松尾ジンギスカンを訪問したアフリカの研修員たち。工場で説明を受ける研修員の様子を国際協力実務研修の参加者らが視察する



滝川市の国際協力を支える「滝川オールスターズ」。「組織という枠の中で大変なこともあると思いますが、それぞれの地域の特性を生かして頑張っしてほしい」と(社)滝川国際交流協会の前田康吉会長(中央)

「滝川流」国際協力の秘訣を探る

札幌市から北へ電車で約1時間。2008年12月中旬、真っ白な雪に覆われた滝川市の丸加高原伝習館で、地域の国際協力に熱意を燃やす13人の大人たちが議論を交わしている。彼らは、北海道、東北地方の自治体やNGOなどで働く、地域の国際協力の担い手たち。JICA札幌主催の「平成20年度地方自治体職員等国際協力実務研修」に参加するため、各地からやって来た。

この研修は、「国際協力を日本の文化に」をモットーにするJICAが、地域の国際協力を担う人材を育てるべく、全国各地で実施してきたもの。北海道では、平成19年度までJICA札幌を会場としていたが、今回は道内でも先駆的に国際協力に取り組み滝川市に研修の舞台が移された。その目的は、滝川市の事例を学びながら、地域の国際協力に携わる参加者たちが共に考え情報を共有するためだ。同市は道内有数の稲作地域。タマネギ、リンゴ、菜種、小麦、ソバ、トマト、トウモロコシなどの栽培も盛んだ。今から



地元の産物をリストにして、研修プランを練る参加者たち

13年前、その農業のノウハウを開発途上国に伝えようと、滝川市国際交流協会(現(社)滝川国際交流協会)が中心となり、JICAと連携してマラウイの青年を受け入れ始めた。今では、ほかのアフリカアジアの国からも研修員を受け入れている。

研修初日は、同協会の山内康裕事務局長をはじめ、滝川市で国際協力にかかわる精鋭たちによる講演が行われた。「最初は「国際協力って何?」という人がほとんどでした。でも口コミで国際協力の輪が広まり、次第に協力してくれる農家、ホームステイを受け入れてくれる家庭が増えていきま



東北チームの研修モデルを発表する(財)宮城県国際交流協会の伊藤友啓さん

した。今では、町中に外国人がいることが普通の光景になっています」と山内さん。リンゴ農家の中村三千男さんは、受け入れた研修員が帰国後にどうしているかを見るためにマラウイを訪ねた。「同じリンゴでも、マラウイと日本では品種が違う。日本のやり方をそのまま教えるのではなく、現地の状況を知り、それに応じた技術指導が必要。国際協力は日本の農業のあり方を振り返るきっかけにもなった。これからは地方の一農家として貢献できれば」と語る。

08年12月、滝川市には、アフリカ6カ国からJICAの青年研修「英語圏アフリカ中小企業振興コース」の研修員が訪れていた。その日は、味付けジンギスカン発祥の老舗「松尾ジンギスカン」の製造工場の



3日間の研修には、参加者に加え、JICA札幌、JICA東北の職員、道内の国際協力推進員なども参加した

視察。一行の視察に同行した参加者たちは、歌原清事務取締役の話に耳を傾けながら、地域産業を活用した国際協力のヒントを学んだ。

国際協力をリードするキーパーソンに

研修2日目の午後は、新潟県の長岡市国際交流センター「地球広場」センター長・羽賀友信さんの特別講演が行われた。「地域で国際協力を発展させるためには、みんなを引っ張っていく。キーパーソンが必要」という羽賀さんの言葉に、「同が深くうなずく。

その後は、北海道と東北の2チームに分かれて、JICAの研修員受け入れを想定したプログラムづくりに取り組んだ。北海道は「エコ」、東北は

地域を元気にする

国際協力を始めよう

日本国内でも「国際協力のまち」として名高い北海道滝川市。その地を舞台に、地域の特性を生かした国際協力を学ぶ研修が行われ、北海道、東北地方の地方自治体などの職員が参加した。

「環境と農業」をテーマに、各地で国際協力につながるような資源を発掘していく。あえて、廃炭坑、廃スキー場の見学を取り入れたのは北海道チーム。「いい面だけでなく、失敗例も見てもらい、研修員と共に地域振興のアイデアなどを考えたい」。一方、東北チームは、土地改良区、農協、道の駅の視察など、地域の特色をふんだんに盛り込んだ。「両チームとも、それぞれの地域性がよく出たプログラム」と、ファシリテーターを務めた(財)北海道国際交流センターの池田誠事務局長。羽賀さんは「いろいろな人の視点が入ると、地域の良さが再発見できますね」とコメントした。研修終了後は、「国際協力という枠で、異業種の人の意見を聞くことができた」(仙台市八木山動物公園・小野寺順也さん)、「今回、さまざまな地域の人たちと知り合うことができた。このネットワークを生かして、何か新しいことができれば」(NPO法人赤平市市民活動支援センター・佐藤智子さん)など、頼もしい声が寄せられた。今後は彼らが地域のキーパーソンとなり、地元色あふれる国際協力をリードしていくに違いない。

JICA研究所では どんな研究をしているの？

2008年10月にJICA附属の研究機関として設立された「JICA研究所」。
そこでは、実際にどんな研究が行われているのだろうか。

JICA

に聞きたい！



2008年11月の新JICA発足・
JICA研究所設立シンポジウム
で講演を行う恒川恵市所長



JICA研究所の研究者と職員

PROFILE

大学では総合政策学部在籍、マクロ経済と開発を学ぶ中で、開発途上国問題への関心を高める。1994年JICA入職。カナダ国際開発庁(CIDA)への出向経験を持つ。2007年5月より現職。



畠中道子 JICA研究所リサーチオフィサー

「世界の潮流を見据えた、
開発課題の研究を進めています」

A 従来、JICAの調査研究事業では、どちらかというと、JICA事業に直結する知識・スキルの提供に重きを置きながら、事業に直接役立つ調査研究が進められていました。しかし、昨年10月に国際協力銀行の海外経済協力部門と統合したことを機に、これまでに蓄積してきた援助実施機関としての経験を体系化していくことや、研究機能を強化して政策研究を行っていく必要があるという声が高まりました。そうした考えのもとに設立されたのが、「JICA研究所」です。

現在、研究所には開発援助にかかわるあらゆる分野・地域を専門とする約20人の研究員が所属しています。重点研究領域は、①平和と開発、②成長と貧困削減、③環境と開発／気候変動、④援助戦略の4つ。具体的には、「ASEAN統合と人間の安全保障の主流化」や「気候変動がアジアの大都市に与える影響」「キャパシティ・ディベロップメントアプローチの比較事例分析」など、約30のテーマで研究が進められています。また、外部の援助・研究機関との連携も重視しており、世界銀行、英国開発研究所などの共同研究もあります。

私たちは、「リサーチオフィサー」として、どのような領域で研究を行いたいのかを研究員と考えていくとともに、研究の運営管理の支援、企画、評価、分析などを行っています。

JICA研究所

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
TEL: 03-3269-2911 (代表)
URL: <http://www.jica.go.jp/jica-ri/>
1階に、開発援助の専門書やJICA事業の報告書などを所蔵するJICA図書館を併設している。
開館時間: 10時~18時
休館日: 土日祝日、年末年始、館内整理日(毎月末日。休館日に当たる場合はその前日)
URL: <http://libportal.jica.go.jp/library/>

また、研究成果を現場や国内外の人々に分かりやすく、迅速に発信し、情報を共有していくためのメディア整備にも取り組んでいます。4月には研究所のホームページを一新し、研究成果に関する論文や報告書、政策提言を示していく予定です。さらに、研究発表の場として、セミナーやシンポジウムも開催していきます。

こうしている間にも、世界の情勢は刻々と変化しています。研究所が目指しているのは、世界の潮流を見据えた開発課題の研究。2~3年で成果を出すことを目標にしています。

日本の政府開発援助(ODA)をより多くの人に理解してもらえよう、研究者と実務者が連携しながら、研究所の活動を強化していきたいと思っています。

01

JICAと科学技術振興機構、連携協定を締結



協定締結を交わすJSTの北澤宏一理事長(右)と
緒方貞子理事長

1月21日、JICAと科学技術振興機構(JST)は、科学技術と外交を連携させ相互に発展させる「科学技術外交」の一環として、連携協定を締結した。これは、外務省、文部科学省、JICA、JSTが連携して実施する「地球規模課題対応国際科学技術協力」に伴って実現したものだ。

この事業は、環境・エネルギー、防災、感染症など地球規模課題の解決に向け、日本の科学技術力を活用し、開発途上国の大学・研究機関などと連携して共同研究を推進することが目的だ。途上国の人材育成と研究能力の向上を図りながら、地球規模課題の解決に資する新たな知見の獲得、技術水準の向上、その成果の社会への還元を目指す。

02

マレーシアで「ミンダナオ平和構築・復興開発セミナー」開催

フィリピン・ミンダナオ島を舞台にした、フィリピン中央政府とモロ・イスラム解放戦線(MILF)との和平交渉が膠着状態にある中、1月13～15日に「ミンダナオ平和構築・復興開発セミナー」がマレーシアのペナンで開催された。このセミナーは、JICA、マレーシア科学大学平和ユニットの共催によるもの。今回で3回目を迎え、フィリピンからは、NGO、学者、宗教家、ジャーナリストなど、キリスト教徒、イスラム教徒、先住民族が一堂に会した。さらに、マレーシアからは、国際監視団の

初代団長や大学関係者、日本からは、JICA関係者を含む7人が出席した。

初日は、参加者全員でミンダナオの現状を分析。平和の実現のために開発が成し得る可能性を探り、問題解決を探る議論が行われた。2日目は、ミンダナオ問題の課題を9つ設定し、グループごとに議論。国際社会の貢献、コミュニティレベルでの復興・開発などが模索された。そして、各グループの議論の成果のもと、①和平交渉、②コミュニティ、③紛争当事者と関係者のレベルで



セミナーで発言するJICAの石川幸子・国際協力専門員(左)と落合直之・東南アジア第一大洋州部企画役(中央)

今後の対策が提言され、停戦監視メカニズムの再構築、コミュニティ開発とエンパワメント(能力強化)の促進、草の根レベルの評議会設置などが盛り込まれた。

03

「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2008」入賞者発表

2月28日、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2008」の表彰式がJICA地球ひろばで催された。

このコンテストは毎年夏休みの時期に、全国の中高生を対象に行っている。47回目を迎える今回のテーマは「地球と生きる」地球に暮らす一員としてできること、考えること。応募総数は7万5010点(中学生の部5万1493点、高校生の部2万3517点)。前年度の1.5倍となった。上位賞(最優秀賞、優秀賞、審査

員特別賞)入賞者には、今年の夏休みに、開発途上でJICAのプロジェクトなどを視察する1週間の研修旅行が贈られる。詳細はJICA地球ひろばのホームページ(<http://www.jica.go.jp/hiroba/ajoin/sanka/essay/>)を参照。

●最優秀賞の入賞者

●中学生の部

青森県立三本木高等学校附属中学校1年 野坂創さん「三本木の夢」

玉川聖学院中等部1年 藤村朱

音さん「ランドセルを通して考えた国際協力」

富士市立田子浦中学校3年 河野岳さん「二人でも多くの命を」

●高校生の部

学校法人大和山学園松風塾高等学校2年 石井陽平さん「父が僕にくれた夢」

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校2年 饒平名玲美さん「真の国際交流と平和」

岩手県立盛岡第四高等学校2年 千葉美華子さん「生きる幸せ」



映画「バオバブの記憶」より

MOVIE

バオバブとともに生きる
サバンナの村の風物詩

「バオバブの記憶」

アフリカに生える奇妙な姿をしたバオバブは、サンテグジュペリの『星の王子さま』では星を壊してしまうと描かれている。しかし、サバンナに暮らす人々には、実も葉も樹皮も生活に役立つありがたい木だ。樹齢を重ねた大木は精霊が宿る聖なる木としてあがめられている。セネガルの首都ダカールから車で2時間のトゥーバ・トゥール村は開発をまだ知らず、バオバブと人が共生している。本作はバオバブと村の少年を中心に、サバンナの人々の暮らしを1年を通して温かい目で丁寧に記録した風物詩。(文=高倍宣義)

2009年/日本/102分

監督:本橋成一

撮影:一之瀬正史

音楽:トベタ・バジュン

語り:橋爪功

公開:3月14日から東京・シアター・イメージフォーラム、ボレボレ東中野にて

EVENT

JICA地球ひろば セミナー

「インド洋大津波によって被災したアチェの復興支援の事例から共に考えよう！」

2004年に発生し、20万人以上の犠牲者を出したスマトラ沖大地震・インド洋津波災害。セミナーでは、被災地インドネシアのアチェの人々の生活再建を支援してきたJICAの取り組みを事例に、人間の安全保障の実現に向けたアイデアなどを意見交換する。シリーズ「人間の安全保障の実践を考えるセミナー」の第6回。

日時:3月27日(金) 18時半~20時

会場: JICA地球ひろば (東京都渋谷区)

問: JICA地球ひろば

TEL: 0120-767278

URL: <http://www.jica.go.jp/hiroba/>

「へそ曲がりと言われるかもしれないが、逆や斜めの視点こそがホンモノの国際人には必要だと思う」。著者は元日本経済新聞の記者。ブラジル・サンパウロ特派員時代に、逆さまの地球儀で世界を眺めるようになってから、先進国と開発途上国の経済格差を意味する南北問題とはまったく別の「南北問題」に気付いたという。この本には、逆さまの世界を知ったときの驚きや、南から見た新鮮な世界がエピソードを交えてつづられているほか、随所に真の国際人になるためのヒントがちりばめられている。学校では教えてくれない「裏読みの国際関係論」が学べる本書を手に、複眼思考の旅に出掛けてみては。

和田昌親著/日本経済新聞出版社/1995円(税込)

BOOK

『逆さまの地球儀 複眼思考の旅』



この本を
プレゼント!
詳細は34
ページへ

新着情報

イチオシ!

EVENT

野町和嘉写真展「聖地巡礼」

土門拳賞などを受賞した野町和嘉氏は、約35年、過酷な自然と調和しながら受け継がれてきた伝統文化をテーマに「大地と祈り」を撮り続けてきた写真家。世界で初めて、イスラム教徒の聖地「メッカ」も取材している。本展では、最新作のガンジスとアンデスを中心に、代表作のアフリカ、エチオピア黙示録、メッカなど約150点を展示。

会期:3月28日(土)~5月17日(日) (月曜休館)

会場: 東京都写真美術館 (東京都目黒区)

料金: 一般800円、学生700円、中高生・65歳以上600円

問: 東京都写真美術館

TEL: 03-3280-0099

URL: <http://www.syabi.com/details/nomachi.html>

BOOK

『国際協力専門員』

技術と人々を結ぶファシリテーターたちの軌跡。国際協力専門員は、JICAが世界各地で展開する技術協力を専門的な立場から遂行する専門家集団。現在、約90人がJICAに在籍し、海外と日本を行き来しながら事業の企画・実施やそれに対するアドバイザーなどを行っている。本書は、農村開発や地方電化、感染症対策など12人の専門員が、経験談をもとに各分野の課題や支援のあり方をまとめたもの。彼らの素顔や国際協力にかける熱い思いも垣間見えてくる。国際協力の仕事を指す人にオススメの一冊。

林俊行編/新評論/2940円(税込)



この本を
プレゼント!
詳細は34
ページへ



水場からタイヤのチューブに水を入れて運ぶ遊牧民の女性たち。チューブの容積は約500リットル

「セネガル」

サヘルに生きる 遊牧民の民

写真真 飯塚明夫

乾燥地に住む遊牧民の取材に向かう途中での出来事だった。私の車が道路工事の現場に近づいたとき、案内役の遊牧民パティ・ソウさん(65)が叫んだ。

「俺が今一番欲しいものがあの車だ」

彼の指差す方向を見ると、工事のほこりを抑えるために給水車が水をまいている。家畜のために毎日多大な時間と労力を水くみに費やしているパティさんが思わず発した本音である。

3月のセネガルは厳しい乾期の盛り、目の前には渴いた大地が果てしなく広がる。パティさんの放牧地はセネガルの中央部リンゲール地方にあり、サヘル

地帯に属している。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の資料によると、この地域は過去100年の間に降水量が40〜50%も減少し、1970年代と80年代には深刻な干ばつに襲われている。

夕方、パティさんの家族の住む放牧地に着いた。真っ先に目に飛び込んできたのが、荷車の上の大きな四角いポリタンクだった。物々しく鉄の格子で保護されている。その隣にタイヤのチューブ、そして円筒状のポリタンクが並ぶ。牧歌的な情景をイメージしていたので少し面食らったが、どれも貯水容器として今では遊牧民の必需品だという。3つをすべて満タンに

※各国の研究者・専門家が集まり、人為的な気候変動の影響などについて、科学的、技術的、社会経済学的な見地から包括的な評価を行う政府間の機構。

すると約1800リットル、しかし2日で空になるとパティさんは嘆いた。

彼の家族は、奥さんが2人、子ども7人、長男の嫁と孫1人の計12人家族である。一日は日の出とともに始まる。簡単な朝食の後、約200頭いるヤギや羊を4つのグループに分け、順番に水を飲ませてから放牧に出す。家畜の体調なども考慮してグループ分けを行うのは大変な作業だが、子どもたちの活躍が頼もしい。

「俺たちが牛や羊をたくさん飼うのはお金のためだけじゃない。家畜は遊牧民の誇りだ。牧畜は俺たちの人生そのものだ」とパティさんは胸をはる。

家畜を放牧に出してしまうと、次は水くみだ。パティさんを利用する水場は約5キロ離れた

バルケージという村にあり、この付近では番大きいという。池などの自然の水場はほとんどないので、多くの水場は動力ポンプで水をくみ上げている。ポンプの周りは水を求める遊牧民と家畜で混雑し、木陰も順番を待つ家畜でいっぱいだ。必要な水の量を確保するのに半日かかることもあるそうだ。

動力ポンプが壊れると深い井戸から人力で水をくまなければならぬ。トゥーバ・リンゲール村の村長モウド・ウッドさん(64)は、「村のポンプは半年前に壊れ、町に修理に出したがいまだに何の連絡もない。その間60〜70頭の家畜が水不足のために死んだ」とまゆをひそめる。「給水車が欲しい」というパティさんの叫びが生々しく脳裏によみがえった。



早朝、放牧に出る前に家畜をグループ分けするパティさん一家



パティさんと奥さんのアミナタさんと子どもたち



病気の家畜に抗生物質の注射を打つ



羊の乳を搾る2番目の奥さん、ファティさん



朝食用に昨夜の残り物を温める



貯水タンク。容積は約1,000リットル



ボッキマサレ村の水場は1984年の大干ばつを期に政府がつくった。7つの村(約4,000人)が共同で利用するという



動力ポンプが故障したので近くの井戸に大勢の人が押し寄せた



7頭の牛を一人で引き連れて水を飲ませに来た少年



トゥンの水場でチューブに水を入れる少女。
満タンにするのに2~3時間かかる



トゥン村にある水場は水の争奪戦が続く。ポンプは村人が資金を出し合って2005年に設置した



タンバクンダ州の地域医療施設で活動する青年海外協力隊員

日本の支援で設立された職業訓練センターで、加工機械の操作を学ぶ訓練生(撮影:今村健志朗)



JICAの活動 in セネガル

貧困を削減し、末永く続く成長を

さまざまな貧困問題を抱えながらも、安定した政治や社会のもとに、地道に発展への努力を続けているセネガル。JICAは貧困の削減と経済成長への支援を通じ、その歩みを後押ししている。

農業、漁業を主要産業とするセネガルでは、都市と地方の格差が拡大し、国民の半数が1日1ドル未満で生活するなど、依然として根深い貧困問題が横たわる。JICAは、①保健・医療や教育などの地方村落の貧困層支援、②インフラ整備、農業・漁業などの産業振興、産業人材育成を通じた持続的な経済成長のための基盤づくりを重点分野に、さまざまな事業を展開している。

基礎保健サービスの不足により、高い妊産婦・乳幼児死亡率など多くの課題を抱える保健・医療分野では、最も貧困の深刻なタンバクンダ州とケドゥグ州で、保健システムを総合的に強化する支援プログラムを2007年に開始。保健アドバイザーや青年海外協力

隊医師・看護師隊員を派遣し、農村の保健・医療サービスの拡充を支援している。今後、無償資金協力による医療施設の整備や、母子保健サービス強化のための技術協力も実施される。

また同地域では、持続的経済成長のためのインフラ整備として、マリとの国境をつなぐ国際道路の建設が06年より円借款で進められており、地域経済の活性化が期待されている。

一方、セネガルは有数のコメ消費国だが、その大半は安くて良質の輸入米に占められ、国産米の消費は総需要量の2割にすぎない。そこでJICAは08年より国産米品質向上アドバイザーを派遣し、国産米振興プログラムの策定を支援している。今後は、JICAが提案した、サハラ以南アフリカのコメ生産量

倍増への取り組み※のもと、国産米が生産されるセネガル川流域を対象に、生産・流通・販売を含む包括的な支援プログラムを本格化し、コメ自給率の向上を図る。

※サハラ以南アフリカ諸国のコメの生産量を10年間で倍増させることを目標とする「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」。2008年5月の第4回アフリカ開発会議で設立が発表された。



セネガル川流域の水田。今後、国産米の品質と生産性の向上を支援する



カラバッシュ

〒105-0013 東京都港区浜松町2-10-1 浜松町ビルB1
TEL: 03-3433-0884

URL: <http://www.calabash.co.jp/>

ランチ: 11時半~14時(月~金曜日)

ディナー: 18時~23時(月~土曜日)(日曜・祝祭日定休)



特産品のピーナッツを使ったシチューをご飯にかけて「マフェ」、魚や鶏肉をタマネギとレモンのソースで煮込んだ「ヤッサ」などが代表的料理として知られる。
東京・浜松町駅そばにある西アフリカ料理店「カラバッシュ」では、これらのセネガル料理を存分に楽しめる。チエブ・ジェンにサラダとコーヒーがついた1000円のランチセットも人気だ。オーナーは、アフリカ専門の旅行会社「道祖神」の代表、熊澤房弘さん。「アフリカ文化の発信基地に」と2005年に開店した。アフリカ音楽のライブのほか、トークショーや映画を通じてアフリカのことを楽しく学べるイベントも開催している。

世界自然遺産のジュージ国立鳥類保護区には、ペリカンやフラミンゴなど数百万の鳥類が飛来する。



16~19世紀にかけ、奴隷貿易の拠点だったゴレ島。今も残る収容所跡がその悲しい歴史を人々に伝えている。1978年、世界文化遺産指定。



首都: ダカール

面積: 19万7,161km² (日本の約半分)

人口: 1,220万人 (2007年)

公用語: フランス語

宗教: イスラム教95%、キリスト教5%

1人当たり国民総所得 (GNI): 750ドル (06年)

経路: 日本からの直行便はなく、ヨーロッパ経由が一般的。

通貨: CFAフラン (XOF)

1XOF=約0.19円 (09年1月現在)

気候: 熱帯乾燥気候に属し、乾期(11~5月)と雨期(6~10月)に分かれる。雨期は30度前後となり、特に内陸部では40度を超す厳しい暑さの日も少なくない。

20本以上の弦を持つ「コラ」と、木琴「バラフォン」は古くから親しまれてきた民族楽器。



西アフリカの玄関口、商業の中心都市として栄える首都ダカール。



地球ギャラリー vol.06

Senegal

セネガル

Illustration/sugawara maiko

セネガル料理

大鍋で作る家庭の味 「チエブ・ジェン」



アフリカの中でも特に洗練されていると評判のセネガル料理。旅した日本人は「コメ、野菜、魚をたくさん使い、味も優しいので食べやすい」と口をそろえる。周辺国ではセネガル料理を出す店がにぎわい、さらにはニューヨークやパリにも、人気のレストランが多いと聞く。
そんな世界各地で親しまれているセネガル料理の代表が「チエブ・ジェン」だ。白身魚とタマネギ、オクラ、大根などの野菜をトマトソースで煮込み、コメを入れて炊いたもので、魚のだしと野菜のうま味が染み込んだご飯のおいしさは格別。セネガルの家庭ではこれを大鍋で作る、皆で囲んで食べるそう。ほかにも、

■私は将来、途上国支援に携わりたいと考えており、JICAの月刊誌は現場での実際に開発援助を行っている人々の生き生きとした声を聞けるので、非常に勉強になります。また、「地球ギャラリー」で紹介される料理屋さんなど、異文化に親しむ記事はとても楽しみにしています。(群馬県・20歳・女性・専門学校生)

■初めてじっくり読ませていただきました。日々の生活に追われ、戦争、飢餓、貧困などにあえぐ同じ地域のどこかの人々を思いやる機会は大切なことだと分かっていても、なかなかありません。対岸の火事としてでなく、困難に目を向けなければその豊かさ、平和は望めません。何ができるのかを探すため、まずは「知る」ことから。そのためにとても有効な資料です。(愛知県・54歳・女性・図書館職員)

■「ゲンバの風」をいつも興味深く拝読しています。一人の熱意ある行動がやがて大きな力となつて、各国の問題を解決して新たな活動につなげている。この連載を読むにつれ、暗いニュースが多い昨今、明るい心になります。(愛知県・60歳・女性・主婦)

■発展途上国においては、経済優先のため、文化財の保存にまで手が回りません。文化財は失われてから、また海外からの指摘でその重要さに気付くものです。12月号の特集は、啓発の意味で大変優れたものであり、今後も継続してほしいと願っています。(兵庫県・49歳・男性・公務員)

【お詫びと訂正】

本誌2008年2月号36ページ「MY ATION」に「ワクチンがなくて命を落とす子どもが年間約4,000人」とありますが、「1日約4,000人」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2009年4月15日

Email: jica@idj.co.jp

FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- ① ランチョンマット (2枚1組、写真と柄が異なるものが当選する可能性もありますのでご了承ください)
- ② スープ皿 (2個1組)
- ③ 書籍『逆さまの地球儀 複眼思考の旅』(26ページ参照)
- ④ 書籍『国際協力専門員 技術と人々を結ぶファシリテーターたちの軌跡』(26ページ参照)



本誌をご希望の場合は
送料ご負担 (200円) にて
お送りいたします。



申込方法：氏名・住所・電話番号・ご希望の号数もしくは送付期間を明記の上、下記にお申し込みください。

申込先：(株) 国際開発ジャーナル社 業務部 (発送代行)

住所：〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル

TEL: 03-3584-2191 FAX: 03-3582-5745

Email: order@idj.co.jp

支払方法：「ゆうメール」の着払いとなりますので、本誌と引き替えに送料200円をお支払いください。

次号予告 (2009年4月1日発行予定)

子どもたちに「学校」を

すべての子どもが質の高い教育を受けられるようにするための取り組みを紹介。



(左) 職業訓練校の生徒が作ったランチョンマットとスープ皿
 (上) 型を使わずに手で形を作る陶器用の土をこねる生徒。使用する土や水の量は、焼く温度や形作りの方法によって異なる
 (下) 村ごとに異なる伝統的な刺繍を施す女性

刺繍と陶芸、伝統を生かした商品で貧困から脱出!

オアハカは「新興国」メキシコにあって、貧困問題が深刻な地域だ。が、一方で、文化的には伝統技術が息づく豊かな土地。人口に占める先住民の割合が多く、例えば女性たちは代々、村に伝わる伝統刺繍を教わり、それをを用いた美しい布製品を作る。

そんな彼女たちが今、州の職業訓練校で、JICAのシニア海外ボランティアから服のデザイン方法や新しい縫製技術を学んでいる。伝統刺繍を生かした、モダンで質の高い商品を作って売ることで、貧しい家庭の生活向上を図ろうとしているのだ。

訓練後は、丁寧な技術と独創的なデザインが人気を呼び、仕立て注文が来るようになった。「仕立屋を開く夢を持つようにな

りました」「オリジナルの服を売る店を開けたらいいなと思っています」と語る女性も。

伝統にあぐらをかいては、貧困問題を解決する地場産業の成長には結びつかない。流れを変えようと、伝統陶芸家の息子であるファンさんは、「民芸品ではなく、工業製品として売れる食器を作りたい」と張り切る。陶芸家仲間とともに、日本人ボランティアを師に、新しい食器のデザインや釉薬の使い方、焼き方などを学んでいる。将来は仲間と、独自のブランドで食器を生産・販売する会社を設立しようと考える。

伝統に新しい発想と技術を吹き込むことが、貧困脱出への道を切り開く。

(20ページに関連記事)



自分が作ったランチョンマットを見せる生徒たち

★ランチョンマット(2枚1組)を3人の方に、スープ皿(2個)をお1人にプレゼント! 詳細は34ページへ→



MY
ACTION
VOL.06

タレント

ゾマホン・ルフィン

ZOMAHOUN-DOSSOU-CYR-RUFIN

PROFILE

1964年ベナン出身。94年来日。99年上智大学大学院博士後期課程入学。バラエティー番組「ここがヘンだよ日本人」などに出演。ビートたけしの付き人でもある。2000年、ベナンに「たけし小学校」を建設以降、教育や医療、環境分野などで協力活動を推進。04年よりベナンの大統領特別顧問。05年にNPO法人IFEを設立。著書に『ゾマホンのほん』（河出書房新社）など。

中学生のころに日本という国を知って以来、ずっと不思議でした。なぜ資源に恵まれていない日本が世界一の先進国に発展できたのか。

でも来日してその理由が分かりました。日本が発展したのは、教育を大切にしてきたからです。江戸時代には子どもたちが寺子屋で学び、みんな平等に教育を受けることができました。だから1920年代には初等教育の就学率が100%に達し、先進国になっていったのだと思います。

ところが、ベナンの就学率は今でも78%。校舎や教員が足りず学費も有料なので、子どもたちは家の農作業などを手伝い、学校に通うことができません。また、教育内容もフランスの語学・文化・歴史などが大半を占め、郷土とつながっていません。

そんなベナンを命懸けで発展させたいと思い、今日まで必死に仕事を



photo by Otsuka Masataka

ベナンの発展に命を懸ける

してきました。私の半生をつづった『ゾマホンのほん』がベストセラーになったときは、その印税で「たけし小学校」を、その後も自分の生活費を切り詰めて、「江戸小学校」と「明治小学校」を建設しました。ベナンの子どもたちに日本に興味を持ってもらいたくて日本語で名付けたこの3校には、現在1,600人が通っています。

また、日本との文化交流を図るため、大学生や社会人が対象の「たけし日本語学校」も設立しました。ベナン人が日本に来ることは経済的に難しい。だからベナンにしながら日本に親しみが持てるよう学校をつくり、日本語のほか、農業研修や観光ガイドの養成など就職につながるような教育も行っています。学費が無料なこともあって1,000人以上の受験者が来たんですよ。

教育以外にも医療や環境などベナンには課題が山積みです。最大都市

コトヌー近郊のノコエ湖では、水上住宅で暮らす村人の生活排水の垂れ流しやごみの投棄によって湖の水質が悪化。ホテイアオイという水草まで大量発生し、湖が危機に瀕しています。「素敵な宇宙船地球号」という番組の企画で今、湖の浄化に取り組んでいますが、JICAにも手を貸してほしい。また、人づくりや留学生の受け入れ、民間投資を呼び込むための協力など、アフリカの人々の幸せのためにリーダーシップを発揮してもらえないでしょうか。いただいた支援は決して無駄にはしません。

日本の皆さん、ベナンという国を知っていますか？ アフリカは国ではなく、大陸だということを知っていますか？ もし知らないとしたら、それはとても恥ずかしいこと。私の大好きな日本の皆さんに、もっとアフリカを知ってもらえればうれしいです。